

宗教動機づけ構造に関する検討

廣 田 信 一

山形大学地域教育文化学部

山形大学紀要（教育科学）第16巻第4号別刷

平成29年（2017）2月

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

宗教動機づけ構造に関する検討

廣 田 信 一

山形大学地域教育文化学部

(平成28年11月15日受理)

要 旨

本研究の目的は、宗教に対する動機づけの構造に関する検討を行うことであった。宗教に対する動機づけにかかわる32項目からなる質問紙が333名の大学生に実施された。因子分析を行った結果、超自然科学関心、現状否定評価、自己肯定評価、向上の4つの因子が見いだされた。また下位尺度においては、現状否定評価、自己肯定評価の間に中程度の負の相関がみられたが、その他の下位因子間の相関は見られなかった。さらに超自然的経験と下位尺度の一つである超自然科学関心に関連があることが明らかとなった。

キーワード：宗教動機づけ、超自然的現象、自己肯定

問題と目的

私たちは宗教をイメージするとき、なんらかの絶対存在、例えば「神様」と呼ばれるような絶対的存在を信奉する活動を思い浮かべる。それに対して我々のような無宗教者あるいは特定の宗教を信奉していない人が当該宗教に対して、そもそもなぜそのような対象を信奉することができるのかといった根源的疑問を内包している。このような疑問が内包される理由については、現代では合理的思考や自然科学が普及したことによって、超越的な神の存在や来世や死後の世界の実在性が否定され、その結果、一切の宗教を否定する傾向があることが指摘されている(小田, 2004)。

しかし現実に宗教は存在し、多くの信徒が多様な宗教に関わっている。文部科学省の宗教法人数総括表平成27年度版によると平成26年12月31日現在で、日本の宗教人口は190219862人となっており、おおよそ2億人と日本の総人口よりかなり多い宗教人口となる。宗教法人自身による報告による調査の人数であることや、本研究における「信奉している」と直接対応しているかどうかについては、かなりの留保が必要であるが、相当数の宗教信奉者が存在していることは推測できる。

ところで宗教の不思議なところは、宗教を信じるためには本来、その宗教を理解すること、すなわち教義や当該宗教における論理だてを理解することが必要であると無宗教者の立場からは想定できるが、そのためには学習が必要でかつ、かなりの動機づけの必要性が仮定されることである。

例えば親の代から宗教に囲まれた環境で過ごしている場合を除き、何かの宗教を信奉す

るためには、様々な宗教の中から選択が行われ、信じていない状態から信じ始めることが必要であると推測できる。

本研究ではこのような宗教を信奉するような変化を想定した場合、現在宗教などに一切関心がない人間の中に宗教を志向する可能性が存在し、何らかの動機づけ過程をへて信奉が発生していくのではないかと仮定した。

このような問題にアプローチするために、本研究では無信奉者が信奉するに至る経過が記述されている資料として、一連のオウム事件で有罪となった信徒達の自伝や裁判の記録などの著書などを参考にした（降幡 2000, 2001, 2001a, 2001b, 2002a, 2002b, 2002c, 2003a, 2003b；藤田 2008；林1998；林・川村2005；島蘭 1997）。記述されていた動機づけの例をいくつかあげると、そもそも宗教に対して興味を持っていない、さらには嫌悪感を持っていた状態に関する記述が複数見られた。また短期間の間にすべて自己の財産（不動産、貯金、保険など）を教団に寄付を行った後（お金は不浄のものであるなどの認識）、出家するといった複数の記述が多く見られた（現世の否定）。また教祖の著書どおりに、呼吸法やヨガを修練しただけで（中には本を読んだだけで）、自身に非日常的な体験が生じたという記述が見られた。さらにこの世の中に対する価値観の齟齬や違和感に対する記述や、さらには解脱したい、悟りたいなど自分自身を向上させたいという欲求に対する記述も多く見られるなど、複数の信者による共通した経験が記述されていた。

そこで本研究では信徒の信奉に至るまで記述された経験や体験を宗教に対する動機づけを構成する要因として注目し、無信奉者が信奉者に変化する過程を構成する要因として研究対象とした。

また心理学の文脈では超能力、心霊現象、占い、UFO、神の存在など現代の科学では立証されていないが、人々に信じられている現象ことを「不思議現象」と呼び、多くの研究がなされてきた（例えば菊池1998、小城・坂田・川上 2015）。

本研究では不思議現象として検討されてきた文脈も加味しながら、宗教そのものを構成すると考えられる教義としての宗教ではなく、宗教を志向するに至るいわゆる動機づけ過程に焦点をあて、その構造を探索的に検討することを目的とすることとした。

方 法

調査対象 A県の大学生333名（男子108名、女子221名、不明4名）が調査に参加した。

調査内容

宗教観動機づけ尺度：本研究で扱う宗教観動機づけ尺度とは、宗教に対する関心や宗教に関連する自己評価や社会観など宗教観そのものだけではなく、その動機づけなどの関連要因を包含した尺度である。

作成方法：オウム事件を中心とした裁判記録や自伝、手記など、主として本人による入信過程や動機、契機などのエピソードを収集した。その後そのエピソードを構成すると思われるキーワードを抜き出すという方法を採用した。その結果32項目からなる質問紙が作成された。回答形式は5件法（あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、ややあてはまらない、あてはまらない：それぞれ5-1点に点数化した）であった。

その他宗教に関連した経験（神秘的経験、超自然的体験）について評定を求めた。回答形式は5件法（あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、ややあてはまらない、あてはまらない：それぞれ5-1点に点数化した）であった。

手続き 講義開始前に担当教員によって質問紙が配布され、その場で実施・回収がなされた。その際に、この質問紙の回答を個別に担当教員が見ることはなく（個人情報への回答はない）、成績などに影響するものでない、また答えたくない場合は答えなくてもよいという旨の教示がなされた。

結 果

(1) 尺度項目の検討

まず作成された32項目の宗教観動機づけ尺度について、各項目の平均値及び標準偏差を求めた。その後、得点分布に偏りがあると考えられる項目を以降の分析から除外した。

残った項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、複数の因子に大きく負荷する項目、どの因子にも負荷が小さい項目を除外して複数回の因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。さらに得られた因子の解釈可能性を検討し、最終的に4因子を決定した。回転後の因子構造および因子間相関行列を表1に示した。以下、各因子について検討する。

表1 宗教観動機づけ尺度の因子構造およびα係数

	因子1(f1)	因子2(f2)	因子3(f3)	因子4(f4)
超自然科学関心(因子1:f1)(α=0.79)				
スピリチュアルに関心がある	.79	.00	-.09	-.06
ハルマゲドンに関心がある	.63	.05	-.09	-.10
超越的な存在(神様など)を信じている	.61	-.10	-.07	.11
超能力に関心がある	.58	.16	.17	-.09
占いに関心がある	.55	.03	.02	-.03
宗教に関心がある	.51	.03	.06	-.03
輪廻転生(死んだ後にあらたに生まれ変わる等)を信じている	.47	.08	-.01	.13
現状否定評価(因子2:f2)(α=0.81)				
何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う	-.02	.75	-.05	.01
むなしさを感じている	.07	.70	.07	-.05
自分は全くだめな人間だと思うことがある	-.05	.67	-.01	.09
敗北者だと思うことがある	.02	.64	.03	.04
今の生活に違和感を感じている	.14	.61	-.01	-.09
自己肯定評価(因子3:f3)(α=0.83)				
色々な良い素質もっている	-.05	.13	.92	-.05
少なくとも人並みには、価値のある人間である	-.03	.08	.84	.07
自分に対して肯定的である	.15	-.23	.52	.01
物事を人並みには、うまくやれる	-.11	-.01	.52	.04
だいたいにおいて、自分に満足している	.11	-.31	.44	-.01
自分には自慢できるところがあまりない	-.08	.30	-.42	.02
向上(因子4:f4)(α=0.75)				
心を成熟させたい	.04	.06	-.05	.78
自分を向上させたい	-.09	.03	.11	.67
精神性を向上させたい	.08	.17	.02	.66
社会に貢献したい	.00	-.21	-.03	.57
因子相関行列				
	因子2			
	因子3	-.52		
	因子4	.10	.09	

第1因子は、「スピリチュアルに関心がある」、「ハルマゲドンに関心がある」、「超越的な存在（神様など）を信じている」、「超能力に関心がある」、「占いに関心がある」、「宗教に関心がある」、「輪廻転生（死んだ後にあらたに生まれ変わる等）を信じている」など、いわゆる自然科学や科学教育において否定されている事項に対する項目に高い因子負荷量が認められたため、「超自然科学関心」因子（今後f1：因子1とする）と命名した。

第2因子は、「何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う」、「むなしさを感じている」、「自分は全くだめな人間だと思うことがある」、「敗北者だと思うことがある」「今の生活に違和感を感じている」など、自分自身の社会的現状に対する評価、とりわけどちらかという否定的評価に関わる項目に高い因子負荷量が認められたため、「現状否定評価」因子（今後f2：因子2とする）と命名した。

第3因子は、「色々な良い素質をもっている」、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「自分に対して肯定的である」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「だいたいにおいて、自分に満足している」、「自分には自慢できる場所があまりない（逆転）」など、自己の内的な評価、特に肯定的評価に関わる項目に高い因子負荷量が認められたため、「自己肯定評価」因子（今後f3：因子3とする）と命名した。

第4因子は、「心を成熟させたい」、「自分を向上させたい」、「精神性を向上させたい」、「社会に貢献したい」など、主として自分自身を向上させたい考える項目に高い因子負荷量が認められたため、「向上」因子（今後f4：因子4とする）と命名した。

その後因子相関を検討したところ、「現状否定評価因子」と「自己肯定評価」因子の間に中程度の負の相関が見られた。

それ以外の因子の相関を見ると、その値の絶対値が.20以下と低く、互いの因子はそれぞれ独立していることが推察された。

次に、各因子を構成する項目を下位尺度とし、各下位尺度の信頼性に関して、 α 係数を算出した。 α 係数については、表1に示した通りであり、因子1は.79、因子2は.81、因子3は.83、因子4は.75と項目数との関連で十分な値を示した。

(2) 下位尺度得点の検討

下位尺度を構成する項目の合計得点を項目数で除した得点を下位尺度得点とし、各下位尺度の平均値および標準偏差を表2に示した。

下位尺度の平均値について検討するため、下位尺度の種類を水準とする1要因の分散分析を行った。

その結果、有意な主効果が認められた ($F(3, 939) = 321.97, p < .01$)。そこで続いてボンフェローニによる多重比較を行ったところ、 $f4 > f3 > f2 > f1$ という順に得点が高かった。

表2 各下位尺度得点の平均値および標準偏差

	平均値	sd
f1	2.42	0.78
f2	3.12	0.92
f3	3.37	0.74
f4	4.23	0.66

(3) 超自然的体験と下位尺度の関連性に関する検討

「超自然的な体験をしたことがある」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した被験者を「体験有」、それ以外の回答をしたものを「体験無」として、「体験有無」を独立変数、各下位尺度得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、因子1の下位尺度得点において、有意な主効果がみられた ($F(1, 314) = 36.12, p < .01$)。

表3 超自然的な体験の有無と下位尺度得点

	超自然的な体験 有			超自然的な体験 無		
	平均値	sd	n	平均値	sd	n
f1	2.91	0.92	48	2.17	0.76	268 **
f2	3.23	0.95	48	3.10	0.92	272
f3	3.56	0.73	48	3.34	0.73	271 *
f4	4.37	0.63	48	4.20	0.66	269

*, $p < .05$

** , $p < .01$

その他因子2、因子3、因子4の各下位尺度得点においては、有意な主効果はみられなかった（表3参照）。

以上の結果から、超自然的な体験と超自然的関心の間に関連性があることが明確になった。

(4) 神秘的な経験と下位尺度の関連性に関する検討

「神秘的な経験をしたことがある」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した被験者を「経験有」、それ以外の回答をしたものを「経験無」として、「経験有無」を独立変数、各下位尺度得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、因子1の下位尺度得点において、有意な主効果がみられた ($F(1, 315) = 32.30, p < .01$)。また因子3の下位尺度得点において、有意な主効果がみられた ($F(1, 318) = 10.97, p < .01$)。その他因子2、因子4の各下位尺度得点においては、有意な主効果はみられなかった（表4参照）。

以上の結果から、神秘的経験と超自然的関心の間に関連性があることが明確になった。

また因子3においても、平均値に差が見られたこと、同様の傾向が超自然的体験においても見られることから、神秘的経験や超自然的体験があると自己肯定が高まる可能性が示唆された。

また「超自然的な体験をしたことがある」と「神秘的な経験をしたことがある」の関係について検討するために、それら2項目のピアソンの相関係数を算出したところ、.81と高い相関係数が認められた。

表4 神秘的な経験の有無と下位尺度得点

	神秘的な経験 有			神秘的な経験 無		
	平均値	sd	n	平均値	sd	n
f1	2.92	0.95	44	2.19	0.76	273 **
f2	3.15	1.01	44	3.11	0.91	277
f3	3.71	0.68	44	3.32	0.73	276 **
f4	4.31	0.64	44	4.22	0.66	274

*, $p < .05$

** , $p < .01$

考 察

宗教動機づけ構造を構成する因子として、超自然科学関心、現状否定評価、自己肯定評価、向上の4つの因子が見いだされた。またそれぞれの下位尺度得点は、超自然科学関心<現状否定評価<自己肯定評価<向上であったことは、被験者が一般の大学生であることから、非科学的なことに関心が少なく、どちらかといえば、現状を肯定し、より向上していきたいといった、人物像が想定できる結果である。

しかし本研究において神秘経験や超自然的体験が、超自然的関心と強い関連があることが示唆されたことは、Gilovich (1991) が指摘しているように、「体験」が解釈に影響を与えている可能性を示唆するものでもある。

さらに加えて体験が関心の原因なのか、関心が経験の原因となるのか、因果関係については本研究で明らかにすることはできなかったが、それらの関係性についても検討していくことが必要である。

本研究では、神秘経験や超自然的体験に当てはまると回答した人数は被験者全体の15%ぐらいであったが、被験者が評価した神秘経験や超自然的体験が具体的にどのような内容なのか、体験や経験の中身に対する吟味も今後必要となる。

さらに超自然科学関心(因子1)を構成する項目の中には、「超越的な存在(神様など)を信じている」や「輪廻転生(死んだ後にあらたに生まれ変わる等)を信じている」などの信奉性を伴った項目も含まれていることから、関心と信奉についての関連性が示唆された。今後より明確に、関心と信奉の関連について明確にしていくことが必要であろう。

また本研究では、信奉にいたるまでの過程の要因に注目したが、一部の宗教の信奉者の記述を参考にしたため、他の宗教には異なる要因も存在している可能性がある。さらに信奉を強化する要因や維持する要因についての検討は行われていない。今後はこれらの要因も含めて宗教行動全体を構成する要因やその機能を明確にしていくことが必要である。

引用文献

- 菊池 聡 (1998) 超常現象をなぜ信じるか 講談社
 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2015) 不思議現象に対する態度の発達 聖心女子大学論叢 125, 116-99.
 藤田庄一 (2008) 宗教事件の内側 精神を呪縛される人びと 岩波書店
 降幡賢一 (2000) オウム法廷 6 被告人を死刑に処する 朝日新聞社
 降幡賢一 (2001) オウム法廷 7 女帝石井久子 朝日新聞社
 降幡賢一 (2002a) オウム法廷 8 無差別テロの源流 朝日新聞社
 降幡賢一 (2002b) オウム法廷 9 諜報省長官井上嘉浩 朝日新聞社
 降幡賢一 (2002c) オウム法廷 10 地下鉄サリンの「実行犯」たち 朝日新聞社
 降幡賢一 (2003a) オウム法廷 11 坂本弁護士襲撃犯朝日新聞社
 降幡賢一 (2003b) オウム法廷 12 サリンをつくった男たち坂本弁護士襲撃犯 朝日新聞社
 林 郁夫 (1998) オウムと私 文芸春秋社

- Gilovich T. (1991) HOW WE KNOW WHAT ISN' T SO The Free Press.
(T. ギロビッチ 守一雄・守秀子訳 (1993) 人間この信じやすきもの 新曜社)
早川紀代秀・川村邦光 (2005) 私にとってオウムとは何だったのか ポプラ社
小田淑子 (2004) 宗教への視座 序論 岩波講座 宗教 第2巻 宗教への視座 岩波書店
島蘭 進 (1997) 現代宗教の可能性 オウム真理教と暴力 叢書 現代の宗教 2 岩波書店

Summary

Shinichi HIROTA : A Study about a Structure of Religious Motivation

The purpose of this study was to investigate the structure of religious motivation. The religious motivation questionnaire that was consisted of 32 items was administered to 333 Japanese university students. We conducted a factor analysis on items. As a result of factor analysis, four factors were extracted: "Interest in paranormal phenomena", "Refusal to accept the present situation", "Self-affirmation", "Want to improve myself". Moreover, a negative relationship between Factor "Refusal to accept the present situation" and "Self-affirmation", although the latter correlation was no significant. There was a relationship between Supernatural experience and Interest for paranormal phenomena.

Key words: religious motivation, paranormal phenomena, Self-affirmation